

人間のことばの特質

一、構造の面から

人間のことばの特質は何かを考える場合に、よくとられる方法は、動物の通信と人間のことばとを比較することである。比較には二つの方法がある。第一は、人間のことばと動物の通信との差異を求める方法であり、第二は、類似を求める方法である。しかし、第一の方法は成功する場合が多いが、第二の方法では失敗することが多いようである。人間のことばに見られる特性の一つあるいは幾つかを分有している動物のことばは殆んど見当らないようだ。もし人間のことばの特性を分有している動物のことばが存在するならば、人間のことばを発生的に考察することができるかもしれない。しかし人間のことばは、人間の知能と並行しているためか、他の動物の通信形態とは隔絶しているので、人間のことばの発生をこのような面からとらえることは不可能に見える。したがって、差異を求める方法から始めようと思う。

動物にも一見複雑に見える通信形態が存在する。その一つとして有名

人間のことばの特質

樺 島 忠 夫

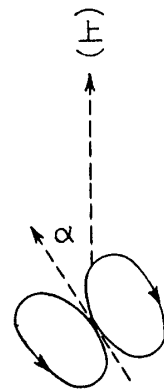
なのは蜜蜂の通信である。外に出て蜜や花粉を発見した蜂は、他の蜂に次のような方法で、食物のありかを知らせることが報告されている。

巣に帰った発見者は非常に激しく右に左にダンスをする。すると踊り手のまわりの蜜蜂は次第に興奮しはじめ踊り手のまわりに集って、触角を発見者の体に押しつける。そのうちに蜜蜂は巣を飛び立って発見者が教えた食物の所に飛んで行く。このダンスは次のような方法で他の蜂に情報を与えるといわれる。

1、ダンスの続く時間は必要とする蜂の数を示す。蜂のダンスが短い時間続けば、数匹の蜂が出て行くが、ダンスが数分間続けば、数十匹の蜂が飛び立って行く。

2、ダンスの速さによって食物のある所までの距離を示す。ダンスの速さが増せば増す程、食物は近くにあり、ダンスの速さがおそければ飛ばなければならぬ距離は大きい。

3、ダンスのしかたで巣からどの方角に食物があるかを示す。水平面上でダンスをする場合には、8の字の向きの方向が食物のありかを指



ということを示し、矢印が垂直方向から右（または左）に三十度傾いていれば、太陽と巣を結ぶ線の右（または左）三十度の方向に飛べということになる。

この通信方法は確かに高級なものである。しかし、人間のことばと根本的に異なる点がある。それは、このダンスによる通信の場合、発見者が体につけて来た蜜あるいは花粉の匂いが大切な役割を果たしているということである。人間のことばでは、さし示すことばと、さし示される事柄との間には、形、色、匂いなどの関係は必要でなく、二項間の関係は恣意的に定められたものとして考えることができる。

また、人間に近い動物とされているサルのことばについての報告（言語生活、昭和三十年、伊谷純一郎）もある。動物園のサルや、実験室の中のチンパンジーの観察はあまり大切なものではない。自然のままの状態にあるサルを観察することは、幸い日本では進んでいる。大分市の高崎山のニホンザルの声について、「クイークイー」は呼びかけ、または返答、「ギャーギャー」は悲鳴、不満、苦痛、恐怖の叫び、「クワンクワン」

という大人のサルの声は外敵襲来時の有力者の警戒の鳴き声、というように、鳴き声の聞えと鳴き声が発せられる場面との関係が観察されている。

ここで「クイークイー」とか「ギャーギャー」とか表現したのは、もちろん人間がそう聞いたのである。実際はこの通りではない。人間のことばは分析すれば、いくつかのかなりちがいがあある音の集まりに分解することができる。このいくつかの数少ない単位の組合せによって異なる意味を表現している。これに対して、動物が発する声は連続的な姿をもっている。

しかし、人間が動物の声を連続的なものと感じ、人間のことばを離散的なものと感じるのは、人間の主観かもしれない。人間の音声は離散的な姿を持つという場合には、音声自体が離散的であるためだけではなく、意味の区別が音声を離散的なものとして感じさせる過程をも含んでいると考えられるからである。日本語を音声学的単位に分析すれば、いくつかの細かい音的単位が求められるが、日本人はそのような細かい単位の相異にはあまり注意を払わないですますことができる。すなわち音声学的単位はすでに意味の異なりを表わす単位としては細かすぎるものであり、実際の一つ一つの発音ではいくらかずつ異なる音を発していても、その区別を区別せずにひとまとめにして、一つの音（すなわち音韻論的単位）と意識することが行なわれている。音声学的単位にしても意味を全く省いては求め難いにちがいない。この意味で、人間のことばが離散的であるという場合には、それが音声的区別だけを意味してはいないといつてよい。背後に意味の区別の意識も存在する。

こういうわけで、人間のことばが離散的な姿を持っていることが、音の区別によって意味の区別を示すことを可能にしたと考えられると同時に、また逆に意味の区別の能力がことばを離散的にしたと考えることができるのである。しかし、とにかく、人間がいくらか異なる音を意味の意識によって一つの音として意識することができるということを含めた上で考えるならば、離散的な構造を人間のことばの一つの特質としてあげることができると思われる。

先には、人間のことばの特質の一つとして、さし示すものと、さし示されるものとが恣意的関係にあることを考えた。このため、社会が異なればことばも異なる。ニホンザルの場合、先の報告によると、サルのことばには方言がないようだとのことである。その後の調査で新しい事実が発見されているかもしれないが、遠い距離をへだてた多くの群について音声の記録をとっても、これらの間には明確な地方差がないし、群による差も認められていないということである。

とにかく、人間のことばにおいて、さし示すものと示されるものと、恣意的関係にあることは、ことばが、さし示されるものに束縛される不自由からまぬかれるために役立っている。それとともに、実際には少しずつ異なる音を同じ一つの音としてまとめて意識する——すなわち離散化は人間のことばの労力をへらす役割を果しており、またことばが離散的構造をもっていることは、ことばの学習、保存を可能にしている。ことばは、個人が生まれる以前から、社会の一つの習慣の体系として存在し、人がその社会の成員として存在する以上、その体系にたよらざるを得ず、また後の時代に体系を伝える役を果す。すなわち、ことばは社会

的事実であるといわれるが、ことばが恣意的記号であり、離散的構造をもつ事が、その社会的事実としての資格を支えていると思われる。

離散的単位が組み合わされて意味の異なりを表わす場合には、文脈の働きがおり込まれている。ことばが、たとえば、ABCの三つの部分に分割して考えられるとき、A、B、Cの出現は互に独立ではない。互に他を拘束しあうし、語の場合ならば、語頭、語中などの位置によっても音の出現が拘束される。したがって単位結合の場合の数は、順列によって作った場合の数よりも少ない数しか存在しない。このことは、音素結合、アクセント素結合、語結合のいずれの場合にもたしかめることができる。また人がことばに反応するしかたも、ABCの三つの部分に分割された場合のことばについて、Aに対する反応のあり方が、Bに対する反応のあり方を拘束し、ABに対する反応のあり方が、Cに対する反応のあり方を拘束するぐあいに、互に関連する。

このような、ことばにおける部分間および部分に対する反応間の拘束を「文脈の働き」というが、文脈の働きは、伝達過程に他から作用するノイズ（伝達における記号や意味のあり方を乱す働き）を防いで、伝達を有利に行なう働きを果している。

文脈の働きが、ノイズを防ぐ働きをしているということは、すなわち、文脈の働きが、ことばをそれが使われる場面から独立させ、ことばをきわだたせる働きをしているということである。

たとえば鳥の通信などをみてみると、鳴き声が何を意味するかは、その鳴き声が、他の聴覚的印象、視覚的印象の総合の中でどのように発せられたかに関係しているように思われる。このような場合を、場面に密

着している、というならば、人間のことは、場面から独立して作用することができる。場面がどのようなであろうと、人間はそれから独立した内容を伝達することが可能であるが、これは、人間のことが恣意的記号の体系であること、離散的構造をもつこと、文脈の働きによってノイズを防ぎ得ること、以上の特性と密接な関係をもつものであると考えられる。

しかし人間のことは常に場面から独立して作用するわけではない。たとえば「雨だ！」ということばは、場面の中におかれて始めて、単に雨が降り出したことを意味するのか、あるいは洗濯物を取り入れることを要求するものかが定まる。人間のことは表現は、場面からの完全な独立と場面への密着との間を行き来しており、言語行動時の条件によってどの程度に独立するか（同じことながら依存するか）を決定している。

人間のことは場面から独立して作用することができるのを、人間のことは一つの能力というならば、場面に依存して作用することができることも人間のことは一つの能力であるといえよう。しかし真に人間の能力であるものは「言語行動時の条件のいかんに対応して、場面から独立するか場面に依存するかのコントロールを行ない得る」ことである。

文脈の働きは、人間のことは場面から独立させる役割を果たすが、同時に、ことば（表現）内部における単位の独立性をへらす役割をも果していることに注意する必要がある。先に文脈の働きを説明した所からわかるように、文脈の働きは要素間に働く独立性の減少作用である。

先に、人間は多少異なる音をまとめて一つの音と意識すると述べたが、これは、その音が文脈の中に存在する場合について述べているのであ

て、音を独立させた場合についてではない。一つの音、一つの語の意味の認識は、それだけをとり出したのでははっきり定まらず、文脈の中にあってはじめて決定される場合がしばしばある。ことばを分析する場合にしばしば出会う困難、すなわち、語の認定の困難、語の意味決定の困難も、文脈の働きがことば内部の単位の独立性を弱めているためにほかならない。ことばの単位の問題として、文が語に先行するか語が文に先行するのかの疑問が生じるのも、文脈の働きの存在から生じるもののようにある。

人間は、ことば内部における単位の独立性の度合に対しても、コントロールすることができる。すなわち、表現内部における文脈の働きを強めたり弱めたりすることができる。ことば（表現）を場面から独立させることとことば（表現）内部における単位の独立性を強めることは別の問題のようであるが、実は密接な関係がある。場面、言語主体者の経験知識など言語以外の因子の助けをなるべくかりずに、ことばだけで伝達するためには、表現内の単位の意味負荷量を小さくすることが必要で、このためには文脈の働きを強めなければならない。また文脈の働きの縮小は、場面、言語主体者の経験知識などに依存して表現内の単位の意味負荷量を大きくすることによって可能となる。

人間は場合によっては、ことばを場面から完全に独立させ、しかも意味的な文脈を破壊して、たとえば「赤い三角形は丸い」のような非現実的な意味を成立させることもできる。すなわち架空の世界を作り出すことができる。架空の世界を作り出すことができるから現実の世界はもちろん作り出すことができる。この能力と、ことばによってことばを説明

する能力、すなわちことばが、object-language と meta-language との二つの性質を持ち得ることによって、ことばの学習を実際の場面に即しないで行なうことを可能にしている。また学問の成立を可能にした。

以上において人間のことばの構造的性質として、記号の恣意性、ことばの離散的構造、文脈の働きの存在を考えてみたが、これらは人間の知能の産物であり、他の動物のことばには見られない。人間の行動の性質として、刺激に対する反応を長い時間止めておき、どのような反応を行なうのが有利かを考慮して、反応を選択することがあげられるが、これと、ことばの構造的性質またはそれによる機能との間には密接な関係があると思われる。人間は環境に応じてことばをコントロールするとともに、また、ことばによって環境をコントロールしている。

二、対人的場面と意味

人間のことばの性質を考える場合に比較することができるのは、動物の通信だけではない。たとえば電報を送信する過程と比較してみることができる。

電報文を送る過程——ただし、人間が文章を作り、また読んで理解する過程は除く——を考えてみると、まず通信文1が存在する。送り手はこれを電信符号に変換し、これを電氣的信号の形で送る。この電氣的信号を電信符号に対応するものとして受けとった受け手は、再びこれを通信文2に変換する。

この過程は、人間のことばによる通信過程と大変よく似ている。人間は通信の内容1を社会的に定められた表現に翻訳し、これを音波の形に

して送る。受け手は音波を受けとってこれが言語的表現に対応するものであることを知り、これによって内容2を知る。

しかしこの二つの通信形態の間には根本的な相違がある。電報の場合には、通信文1と通信文2とは同じものでなければならぬ。もし同じでなければ何処かにノイズが入ったことになる。ところが人間のことばの場合、内容1と内容2とは同じものとは限らない。同じものであっても困る場合もある。

ことばの過程は、電報が送られる過程よりは、人が鏡に自分の姿をうつす所に似ている点がある。この場合、人の姿と鏡に写った姿とは左右が逆になっている。話し手が「明日あなたは私の家にいらっしゃいますか？」と尋ねたとしよう。聞き手は「明日私はあなたの家に行く」かどうかについての返答をしなければならぬ。この場合「あなた——わたし」「わたし——あなた」の変換が行なわれている。また「来る——行く」の変換も考えなければならない。

だが、送り手側、受け手側の、それぞれの内容の関係を鏡の場合にたとえるのは、不十分なたとえにすぎない。人間のことばはもっと異なるものを含んでいる。「明日あなたはわたしの家にいらっしゃいますか？」という文の傍線をつけた部分がこれにあたる。まず敬語「いらっしゃる」「ます」、それから、相手に質問していることを表わす、または相手に返答を要求する「か？」がある。これは鏡のたとえでは説明しにくい。また「行く——来る」の関係も、人の姿と鏡の影との関係よりは複雑な問題をもっている。

このように、送り内容と受けとり内容との間に、ある種の変換が行な

われて理解が成り立つことは、人間のことばが対人的な場面を予想していることによる。対人的な場面とことばの変化との関係は、文の末尾の部分によく現われるので、ここで分析を行なってみよう。たとえば、

「これは本か?」「これは本ですか?」「これは本?」

の三つの文を考えてみる。これらの文は次のように分析して考えることができる。

	1	2	3
これは本	0	か	
これは本	です	か	
これは本	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	

ここで、0は特に形として現れなくてよいことを示し、☒はそこに現れるはずの形が省略されたことを示す。

1の部分は表現の対象となる素材に、話し手がどのようなくづけをほどこしたか(わくづけについては後で述べることにする)を表わす部分、2の部分はそのわくづけに対して、話し手がどのように認定するか、すなわちそれを断定するか否定するか、また蓋然性を認めるか、過去のことと認めるか、など、それとともに、2の部分は話し手の、聞き手に対する待遇を示す部分でもある。3の部分は話し手が聞き手にどのように働きかけるか、すなわちことばの内容を伝えようとするか、詠歎的に表出するのか、話し手に言語的反応を要求するか、行動的反応を要求するか、またこれらの働きかけをどのようにもちかけるかの態度を示す部分

である。

このように、文末部は粗く分析すると意味論的に三つの部分に分析することができる。これを文法論の問題として扱う人もあるが、私は意味論の問題として扱いたい。

「早く行け」「早くいらっしやいませ」

の二つの文は次のように解釈される。

	1	2	3
早くゆ(0 く)	0		
早くいらっしやい	ま(0 す)	せ	

しかしこの三つの部分は、常に完全に形として揃うわけではなく、ある部分が省略されたり、また二つの部分が合わされて一つの形であらわされることもある。たとえば、電話での対話で、第一の人物が、第二の人物に、音を聞かせて、これが何の音かを当てさせようとしている場面を考える。

一 「もしもし。これは何の音でしよう?」

二 「それはオルゴールの音でしよう」

一 「でしようか?」

以上を文毎に考えると次のようになる。

	1	2	3
これは何の音	0	もしもし	
でしよう			<input checked="" type="checkbox"/>

それはオルゴールの音 でしよう 0

☑ でしよう か

第一の文では1の部分の形にあらわれない。そして2の部分の聞き手に対する待遇が3の部分の聞き手に対する働きかけと一つに合わされた形となっている。第二の文では3の部分が省略されている。また第四の文では1の部分が省略されている。

以上のように文末部を分析した場合に求められる、2と3の部分は対人的場面のあり方によって表現が変化する。

たとえば、同じく、聞き手の行動を要求する場合でも、

行け。

行っていただけませんか。

行っていたかとありがたいです。

のように、話し手が聞き手をどのように待遇するかによって、3の部分のあり方が、命令、疑問、平叙の形をとる。また待遇の表現も変化し、

これは本か。

これは本ですか。

これは本でございますか。

のように、話し手が聞き手を待遇するあり方によって、3の部分はかわらずに、2の部分が段階的に変化（0、です、でございます）することがある。

同様に1の部分の表現も対人的場面のあり方によって変化する。この問題を考えるに役立つ重要な観察が、ゲルプとゴルトシュタインによ

人間のことばの特質

ってなされている。

失語症患者に種々の異なる色を分類させた。普通の人間ならば、濃い赤、淡い赤、桃色を一つの「赤」のワクの中にまとめることができる。しかし失語症患者は色の感覚はあるのにそれができなかった。これによって細かい差異は切りすてて、似た性質によって一つのワクに属するものとして把握するワクづけの態度が、人間のことばの使用を可能にする根本的な能力であることがわかる。そしてこのワクづけの態度が、1の部分の表現を考える上で重要なことなのである。

一般に固有名詞の場合には、ことばであらわそうとする対象に、ある名称が固定しているという感じが強い。しかし普通名詞の場合には、このように考えたのでは解決できない場合が生じてくる。ある対象を「机」と表現する場合には、その対象に「机」という名称が社会習慣として与えられているからそう言うのだと説明するのは正しくない。たとえば野外で文字を書く必要に迫られた時などに、平たい石をさして「この机の上で書こう」ということもできる。表現は対象をどのわくに入れて認識するかという、ワクづけの態度によって行なわれるのであり、社会習慣として定まっているのは、このワクづけの態度なのである。このことは人が幼時から、ことばの使用のしかたを修正されながら学習することによっても考えられることである。

このワクづけの態度を説明する概念として「領域」をたてると便利である。たとえば、「敵」とか「味方」という場合を、領域によって説明すると、話し手の属する領域に属する表現対象は「味方」であり、「敵」はその領域にはない。この例では、領域に属するか、属しないかの二値

的規準によつて説明しつくすことはできないが、対人的場面によつてワクづけの態度が変化する場合には領域の概念はかなり有用になる。たとえば指示詞の場合、表現の対象が話し手の領域にあれば「こ」で表現され、対象が話し手の領域になく、聞き手の領域にあれば「そ」、話し手の領域にも聞き手の領域にもなければ「あ」で表現される。また人称代名詞の場合、対象が話し手の領域にあれば「われ（われわれ）」で表現し、対象が話し手の領域になく、聞き手の領域にあれば「汝（なんじら）」で表現する。話し手の領域にも聞き手の領域にもない場合には「かれ（かれら）」で表現する。

敬語の使用は、対象がどの領域にあるかということ、話し手の聞き手に対する待遇および話し手の表現対象に対する待遇のあり方の三者によつて複雑に変化する。たとえば、自分の父親の動作について「父がもうしました」とも「お父さんがおっしゃいました」とも言うことができるが、観察によると、話し手が聞き手に尊敬の待遇をしなくてすむほど、父親に対する尊敬の表現が強く形をとつてあらわれてくる傾向を示す。これは聞き手が次第に話し手と領域を共通にしてくるために、話し手の、父親に対する本来の待遇が形としてあらわれてくるものと解釈できる。また職場の上役のことを話す場合に、聞き手が話し手と親しいほど、上役に対する尊敬の表現が少なくなる現象もみられるが、これも同様に解釈することができる。

なお「行く、来る」は話し手の領域に表現の対象が入り込む場合に「来る」、出る場合に「行く」と表現されるが、たとえば、話し手が聞き手にむかつて（話し手も聞き手も聞き手の家に居ない時に）「明日君の家に来てもいい？」とたずねる場合がある。この場合は、「君の家」が聞き手の領域にあるものと意識し、話し手自身をも聞き手の領域の中におい

て、話題の対象（私）を、そのわれわれの領域の中へ移動させるものである。しかし、同時に「明日君の家に行ってもいい？」ということもできる。この場合には（私）は「君の家」が属する領域の外にある。同じ動作がこのように異なった表現をとり得るのは、表現対象に対するワクが固定したものではなく、ワクづけの態度に自由さが存在することを示すものであろう。

以上のように、対人的場面のあり方によつて表現を変化させ、また聞き手は表現を受けとつてそれに対人的場面と相対的に理解する。このことは次のことを意味する。すなわち話し手がものを言う場合には、彼にとつて、聞き手は話し手の外部に、環境の一部をなして存在して話し手のことばを受けとる録音機のようなものではない。聞き手は話し手と協力関係にあり、話し手と聞き手とで「我々」の意識を構成してことばを成立させる役割をになうものである。

人間のことばは、たとえば、ある人がライオンに喰われて悲鳴をあげ、それを他の人間が聞いて逃げ出す場合に見られるような過程とは異なる。この場合にはコミュニケーションを成立させる協力関係は見られない。たとえば、互に争う関係にあり、汚いことばをやりとりする場合にも、ことばのやりとりが成立するためには、話し手と聞き手（これは互に入れかわる二項であるが）が協力して対人的場面を形づくる営みを行なわなければならない。したがって敵対関係が強くなると、ことばのやりとりを拒否するに至ることになる。

以上に考えて来た、構造的、意味的特性から考えられる人間のことばの機能的特性はコントロールと協力とにある。他の機能的特性、すなわちことばによつて意味的構成体を創造し保存する機能とこの二つの機能とが一つになって人間の文化を成立させているのである。